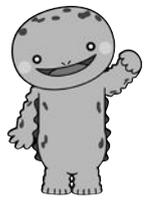




コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



好みの「和みの灯り」を作成



通りを彩る「ロジナリエ」



濱上吉徳さん(62歳)竹野町竹野

町内全戸にもされることを願って…

「灯り」で誇れるまちの風情を！

「光に包まれた、風情のあるまちができれば」と、地域住民と共に、誰をも「心が和む灯り」で包み込むようにする元気な男性を紹介します。

今や、竹野地区一体の風物詩となっている「和みの灯り」(一種のあんどん)。この明かりで町並みを照らし、「ロジナリエ」として地域住民を奮い立たせているのは、濱上吉徳さん。

濱上さんは、定年後、自治会の役員を務める傍ら、「地域のためにできることは？」と考えていたとき、とあるモデル事業のワークショップで、「和みの灯りで全町を飾ってどうか、と立案したのがきっかけ」と話します。

「浜」を灯りのまちに！

空には「星」、海には「漁火」、浜には「ウミナリエ」(※注)、通りには「和みの灯り」…竹野地区での光の演出。

光でまちを包みたい、そんな思いを抱いた濱上さんは、自ら本格的に「和みの灯り」作りに取り掛かりました。

実行委員会が設立され、和みの灯りを活用した活動を続けていくための何かいい愛称はないか、と皆で思案した結果、神戸のルミナリエを参考に、「路地を明かりで飾るからロジナリエ」とすることにしました。

濱上さんは「ロジナリエを広めるには、住民の理解と協力が必要」と、ロジナリエ開催の時期に、「和みの灯りを軒先に出してほしい」と、地域住民に呼び掛けました。

不安をよそに、住民の反応は「かなりノリ気」。「みんなが楽しんで、夜、点灯しているの見た観光客からも『心が落ち着く』という声が出ている。これも、地域住民の協力があつたから」と濱上さんは語ります。

楽しい活動が活力の源

月に1回のペースで、「和みの灯り作り教室」を開いているという濱上さん。「特に活動日を決めているわけではなく、予約があれば、実行委員会の委員で対応する」とのこと。地域住民のほか、自然学校で竹野を訪れた市内小学生も「あんどん作りを体験しています。中には、京阪神からの問合せも…」。

「いかに経費を掛けずに作るか」。和みの灯りの材料は、浜に打ち寄せられた木の枝、使えなくなった電気製品のコンセントなどです。電球も、消費電力が少なく熱を帯

びにくいLED(電球色)に。濱上さんは「流木とはいえず、浜に行けば必ずあるとは限らない。教室の参加人数が多いときは、田結や京丹後、果てには鳥取にまで探しに行ったこともある。流木採取が一番の苦労かな」と笑います。

紙の種類を問うと、「明かりのほのかさを出すには、やはり和紙。竹野産の和紙があればいいが、さすがに紙すきまでは(無理)…」と苦笑い。

竹野全域に広げるのが目標！

ロジナリエは、5月の連休や7月の花火大会前後、お盆、クリスマス前後に実施されます(今後、点灯機会を増やすことも検討)。

濱上さんに今後の抱負を聞くと、「ロジナリエが竹野全域に広がれば、すぐには無理だが、全地区の力を頼りに、頑張ってもらえるよう、ノウハウを積み上げていきたい」と意欲満々に答えていました。

◆ロジナリエ

「和みの灯りストリート」
▽日時 7月27日(土)～31日
(水)夕方～午後9時30分
※30日(火)は、竹野川両岸にも点灯

(※注)ウミナリエ…竹野浜に、ペットボトルと発光ダイオードで組み立てられた渚のイルミネーション。

ま ち の 話 題

三方地区公民館綱引き大会
白熱した会場で綱を引く手に力が入る！

6月22日、三方小学校体育館(日高町栗山)で、綱引き大会(三方地区公民館主催)が開催されました。

男性23チーム、女性15チームがそれぞれトーナメントで対戦し、ただならぬ緊張感の中、熱戦を繰り広げていました。

「子ども綱引き」では、小学6年生以下の子どもたちが大人と対戦し、大人が圧倒される一幕も。勝った子どもも、ご褒美にお菓子をもらい、上機嫌でした。

会場が一体となり、どの対戦にもエールが贈られ、各メンバーは、勝敗にかかわらず達成感に満ちていました。



▲幻想的な光景に会話が弾む参加者

6月22日、奥山区公民館(出石町奥山)周辺で、第32回ほたる祭(奥山観光ほたるの郷・福住地区公民館主催)が開催され、多くの観光客らでにぎわいました。

公民館では、日中、ホタルの絵画・写真展や地元で古くから伝わる「おさよつばき」の絵本原画展が開催されました。また、奥山区で養殖された魚「モロコ」のつかみ取りも行われ、子どもたちがずぶ濡れになりながら歓声を上げて楽しみました。

夕方からは、ホタル鑑賞会が開催され、観光客らは、奥山川に沿って乱舞する幻想的なホタルの光を満喫していました。

第32回ほたる祭 奥山川を舞台に ホタルが光の舞



▲どのチームも全身全霊(?)で綱を引く！

笑顔の輪

「どいへでも喜んで」を合言葉に
ふるさと紙芝居の会(出石)

「ふるさと紙芝居の会」は、平成22年に設立し、会員は5人。各区に伝わる民話や昔話などを基に、公民館や地域の高齢者の協力を得て、民話発祥の地を訪れたりしながら、紙芝居を作成し、上演しています。

会の活動は口コミで広がり、各所から声が掛かります。主な訪問先は保育園、幼稚園、小学校、公民館、福祉施設。昨年度は約50回上演しました。代表の芝地裕子さんは「紙芝居を通して、次代を担っていく子どもたちに豊かな心、『ふるさとを愛する心』を育みます。



▲最新の作品「おりゅう灯籠」を囲んで

たいと考えています」と話します。

これまでに作成した作品は、約50点。民話などのストーリーから大きく外れることなく、場面の展開、クライマックスなどを考えて作っています。

「ふるさと紙芝居の会」が使う紙芝居は、普通の紙芝居の約4倍の大きさがあり、まずその大きさが子どもたちの心をつかみます。会員の峠さんは「上演して喜ばれるとやりがいを感じ、自分たちの方が生きがいももっている。また、若いお母さんにも見ってもらい、住んでいる地域のことを知ってもらいたい」と話します。

子どもたちから、「また来てほしい」や「紙芝居で読んでもらったところに行ってみたい」などの声を聞くことが会員の励みになっています。芝地さんは「依頼があれば、どこへでも喜んで訪問します」と笑顔で話します。

上演依頼は芝地さんまで。
☎ 52-2468